愛知県瀬戸市の窯垣に関する調査研究

KAMAGAKI in Seto city Aichi prefecture Japan

小池則満

By Norimitsu KOIKE

要旨

愛知県瀬戸市には洞町地区を中心に、窯垣（かまがき）と呼ばれる古い窯道具を利用した塀や壁がみられる。本研究では、窯垣の現況について調査し、その材料、積み方について考察した。その結果、窯垣は石積み工法と同様の特徴を認めるとともに、その材料や積み方から、年代推定が可能と考えられることを指摘し、いくつかの試論を行った。また、地域的特色を顕著に示し意匠的にも美しいことから文化財的価値が認められ、窯業史と関連させながら体系的に研究を進める必要性を指摘した。

1．はじめに

愛知県瀬戸市には洞町地区を中心に、窯垣（かまがき）と呼ばれる古い窯道具を利用した塀や壁がみられる。観光ルートとしての整備やまちづくりのための資源として活用されているが、歴史的な土木構造物としての調査・研究は行われていない。そこで本研究では、窯垣の現況について調査するとともに、今後の保存、利用方法について考察する。

2．瀬戸市洞町の歴史と保存活動の経緯

愛知県瀬戸市は、１２世紀頃から焼き物の町として栄えた古い歴史をもつ。洞町地区は、江戸時代における陶器生産の中心地区であり、明治時代には、本業タイル（江戸後期から生産が開始された磁器に対して、もともとの仕事という意味で、陶器を本業と呼んだ）の生産も行われていた。

窯垣が発生したのは、地元では江戸～明治時代頃ではないかと言われている。登窯（のぼりがま）を用いて陶器を焼く際に用いられる窯道具で古くなったものを、廃物利用として積むようになったものであり、これには、傾斜の多い地形であったことも要因としてあげられる。その後、燃料が薪や石炭からガスに移行して登窯での制作も行われなくなったことから、窯垣は徐々に作られなくなった。

平成３年に、やきものの町としての歴史的・文化的資源を積極的に保存・活用することを目的として、瀬戸市洞町地区の有志が集まり洞町文化会を設立したのをきっかけに、窯垣の独特な景観が見直され、紹介されるようになった。その後、「窯垣の小径」の整備され、平成７年に窯元であった民家を改修した「窯垣の小径資料館」がオープンした。こうした観光ルート整備における住民活動の経緯（平成２～１２年）については、玉井らの研究に詳しい[1)]。その後も、洞町で活動する陶芸家の作品を展示する「窯垣の小径ギャラリー」が、やはり民家を改修して運営されるなど、やきものの里をキーワードにした取り組みが継続的になされている。

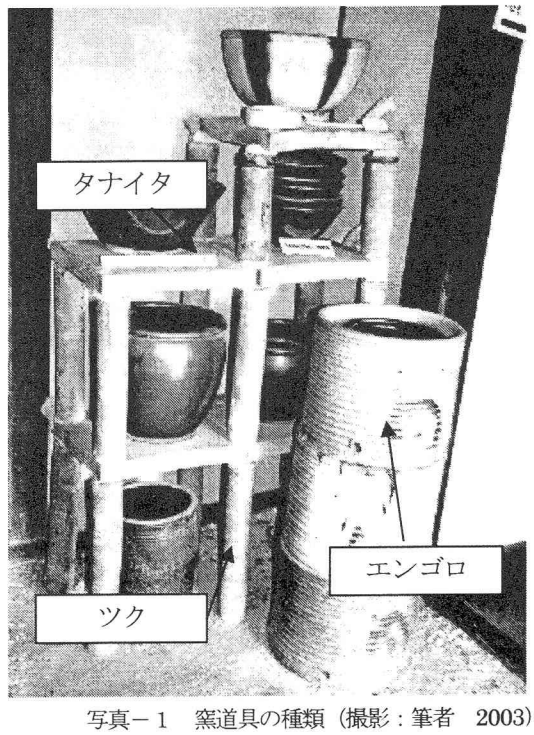
Keyword: 窯垣　窯業　石積み工法

正会員　博士（工学）　愛知工業大学都市環境学科
（〒470-0392）豊田市八草町八千草１２４７）

3．窯垣に用いられる材料

窯垣は洞町地区全体に点在しているが、ここでは、最近整備された「平成の窯垣」を除く古くからの窯垣について、踏査とヒアリングをもとに考察することにする。

まず、窯垣に使われている窯道具として「エンゴロ」「タナイタ」「ツク」の３種類がある。これらは写真－１で示すように、窯の中で積み上げられ、製品を保護、および効率よく詰め込むために用いられていた。それぞれの窯道具には、様々な窯元の印が記されており、窯垣の文様を豊かなものにしている。中に詰められる製品によって、様々な大きさの「エンゴロ」「タナイタ」「ツク」が作成されたため、それらの大きさも多種多様である。また、「エンゴロ」には小さな空気穴が底に近い側面に２カ所つけられている。



写真－１　窯道具の種類（撮影：筆者　2003）

4．窯垣の分類

窯垣は、斜面の土留めとして用いられていることが多いが、住宅の基礎部分や舗装材のように地面に敷かれているもの、門柱などに用いられているものなど、様々である。本研究では、土留めとして機能している窯垣をとりあげ、その積み方について考察する。

（1）「エンゴロ」の横積み

写真－２は資料館北３０m付近にある「エンゴロ」を横積みした窯垣である。この場所で使われている「エンゴロ」の直径は約３６cm（１尺２寸）のものである。この大きさのものが、窯垣に用いられている「エンゴロ」として最も多く見られる。「エンゴロ」横積みの窯垣は地区内の各所に見られるが、筆者が踏査した範囲では、写真－２のものが最も高く、高さ約３mである。この場所の「エンゴロ」の表面には釉薬で「正」と書かれているものが多い。また、底面には布目がついている。

同じく「エンゴロ」を横積みにした窯垣の例を写真－３に示す。資料館から東へ100mほどの場所にある窯垣であるが、「エンゴロ」を割って「タナイタ」や「ツク」を埋め込んで積み上げられている。この「エンゴロ」にも、図－１の①もしくは②のような刻印がみられるほか、布目も確認できる。タナイタには図－１の②に示す刻印が見られる。

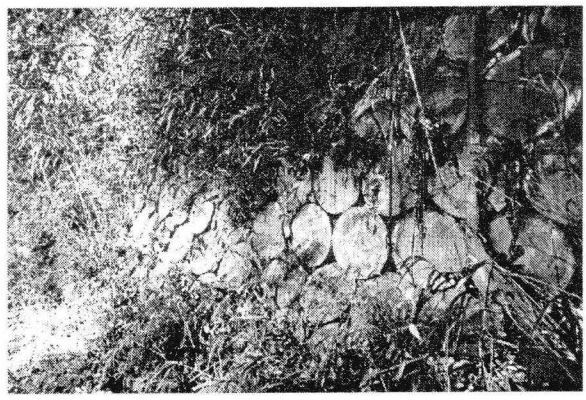
（2）「エンゴロ」縦積み

本来、「エンゴロ」は窯の中で縦に積み上げるものであるが、安定しないためか、縦に積まれている窯垣は横積みに比べるとあまり多くない。写真－４の「エンゴロ」は高さ約２７cm(９寸)で、天端までの高さは約１ｍ３０ｃｍである。隙間に「タナイタ」や「ツク」を埋めこんで積み上げている。図－１の④に示すような印が釉薬で書かれている。

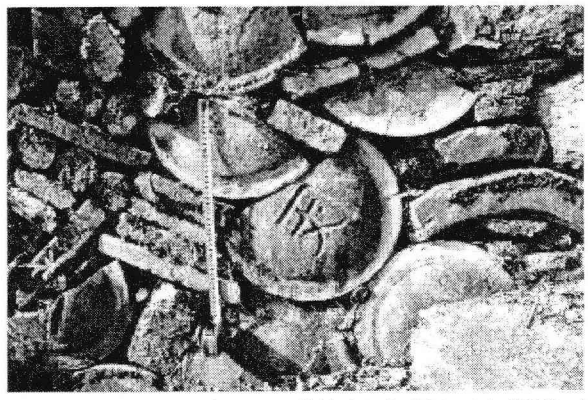
（3）「タナイタ」「ツク」の谷積み

写真－５に示す窯垣は、「窯垣の小径資料館」南側のもので、上段、中段が「タナイタ」「ツク」のみの組み合わせとなっている。下段の石垣は、石積み工法でいうところの「谷積み」であると考えられ、また「タナイタ」「ツク」で構築された部分も、谷積みの延長として交互に「タナイタ」「ツク」が斜め向きに積まれている。天端に近い上段も「タナイタ」「ツク」の組み合わせであるが、「ツク」「タナイタ」を縞々になるように積んでいる。上段の窯垣（高さ約３２ｃｍ）は下の部分と明らかに分けて作られていることから、後年に追加して構築されたものと考えられる。天端には「タナイタ」を並べてある。図－１の⑤に示すような刻印が多くの「ツク」および「タナイタ」に記されており、他の刻印等は見られない。

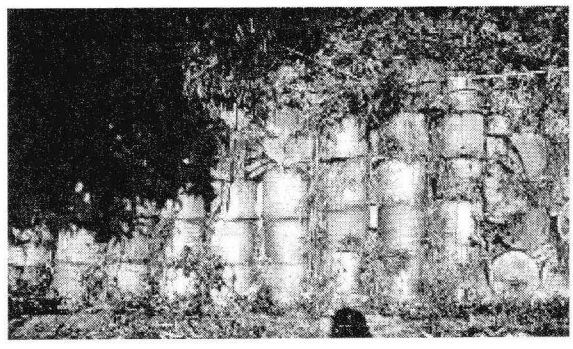
写真－６も、「タナイタ」「ツク」による谷積みであり、意匠的にも美しいものとなっている。石垣でいう「角石」にあたる部分において「タナイタ」を交互に組み合わせた「算木積み」も見られるほか、根石の部分には「エンゴロ」を埋めてあるのが確認でき、石積み工法に極めてよく似た特徴を持っている。天端には、やはり「タナイタ」を並べてある。その上にある塀の部分は、最近の修景によるものである。



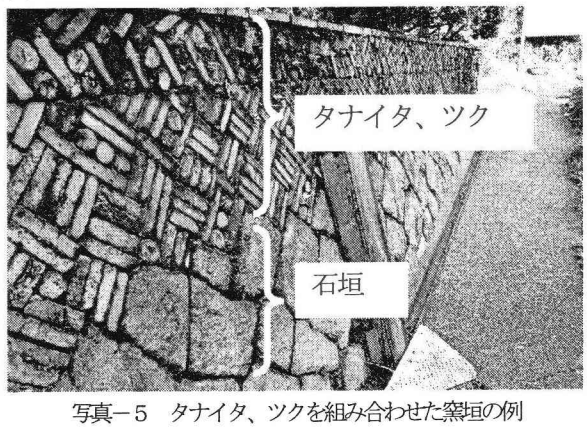
写真－２　エンゴロを横に積んだ窯垣の例（撮影：筆者　2003）



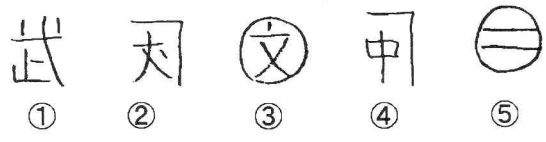
写真－３　エンゴロを加工して構築された窯垣の例（撮影：筆者　2003）



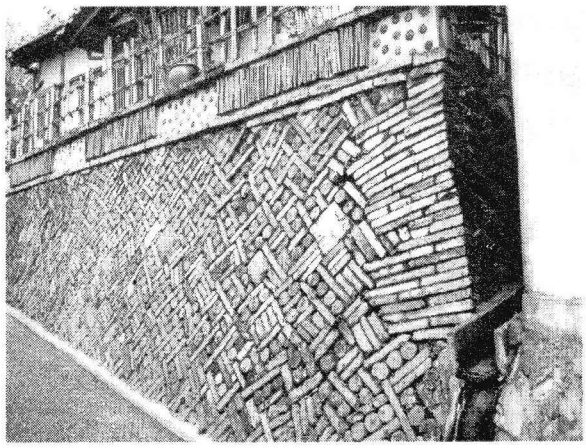
写真－４　エンゴロを縦に積んだ窯垣の例（撮影：筆者　2003）



写真－５　タナイタ、ツクを組み合わせた窯垣の例（撮影：筆者　2003）



図－１　窯道具に見られる印の例



写真－６　タナイタによる算木積みの例
（撮影：筆者　2003）

５．窯垣の年代推定方法に関する推定

窯垣が構築された年代の推定方法についての議論はこれまでなされていない。そのため前述の通り、地元では明治時代頃ではないかと言われているが確証はない状態である。そこで本研究では、材料および積み方からみた年代推定方法について、試論をおこなう。

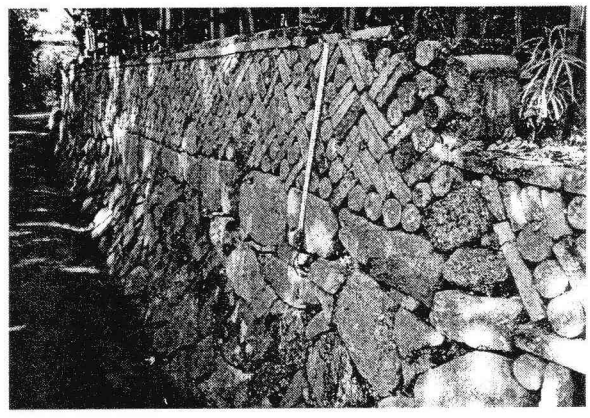
（１）窯道具による年代推定

窯道具も、古いものは手作業で作成されており、たとえば「エンゴロ」の底面に、布目やロクロから切り離すときの跡が観察できるが、大正７～８年頃には、「エンゴロ」は、プレス機械による大量生産が行われるようになったとされている[2)]。したがって、窯垣に用いられている「エンゴロ」を観察することによって、少なくとも大正期より以前にさかのぼることが可能かどうか、判定できる。しかし、写真－２，３，４に示した「エンゴロ」はそれぞれ底面に布目等を確認できるが、この大きさのエンゴロは「大エンゴロ」とも呼ばれ、ロクロ生産のみであったとも言われる。したがって、布目やロクロ目のみでの年代推定は難しいともいえる。

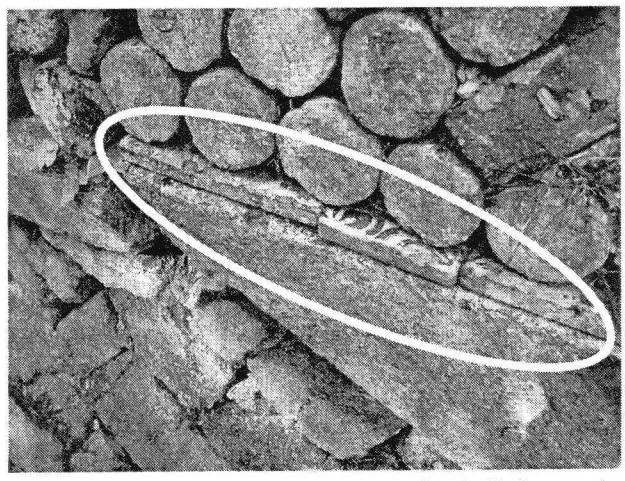
（２）積み方による年代推定

本研究では、「窯垣の小径資料館」（旧寺田邸）の南側にある窯垣を取り上げて、発生時期の推定方法について試論を行う。

南側法面の窯垣は石垣とともに築造されているが、石積みの様子より、築かれた年代が異なるようである。まず、南西側より下部の石垣は、高いところで約３０ｃｍの高さであるが、写真－７に示す通り、積み方はいわゆる野面積みに近く、原石を積み上げた様子となっている。一方で、南～南東面にかけての石垣はいわゆる谷積みの形をとっており（写真－５）、南西側の石垣よりやや時代が下るものと推定される。谷積みは明治期に入ってから我が国で多く積まれるようになったといわれることから、少なくとも、谷積み上部の窯垣は明治期以降のものであると推定できよう。また、写真－５で示したように、谷積みされている石垣と窯垣中段との間に天端の跡が見られず連続して積まれていることから、同一時期に構築されたと考えられる。南西面については、石垣の天端石の上の窯垣が積まれており、石垣と窯垣の築造時期は異なるものと考えられる。ここで注目すべきは、南東面の天端石と窯垣の間に、写真－８において丸く囲んで示したところに「本業タイル」をはさんである点である。また、南東面の上段部分の窯垣でも本業タイルが挟み込まれているのが確認できる。本業タイルとは、明治より大正期にかけて瀬戸で製造された陶器のタイルである。特に、濃尾地震（1891 年（明治 24 年）発生）からの復旧・復興にあわせて大量に生産されたとされる。また、この窯垣の本業タイルは銅板からの転写によって作成されたものであり、明治３０年代以降の制作であると思われること、この部分の窯垣は南面から敷地の西側の方へ回り込むように築造されており、寺田家の別棟（1912 年（大正元年）建築）の基礎を兼ねていること、などの理由から、最上部の窯垣は大正元年の築造であると考えてよいと考えられる。



写真－７　資料館南西面の石垣と窯垣（撮影：筆者　2003）



写真－８　挟み込まれている本業タイル（撮影：筆者　2003）

以上の考察から、およそ次のように構築時期を推定できる。

①明治初期に現在の旧高田邸が建てられ、敷地もなんらかの形で整備された。当初は、石垣あるいは自然斜面になっていたものと考えられる。南東面の石垣の築造時期は不明であるが、少なくとも②よりも先であると考えられる。

②明治年間に南～南東面の谷積み石垣および窯垣が築造された。

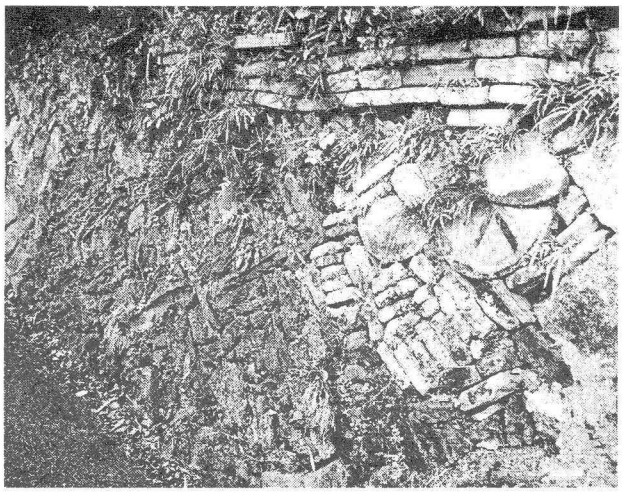
③大正元年の旧寺田邸別棟建築に合わせて、南西～南東面の上段部分にかけての窯垣が追加で築造され、現在の形となった。

（３）オニイタ（鬼板）と窯垣

洞町地区におけるもう一つの特徴的なものとして「オニイタ」の石垣がある。「オニイタ」とは褐鉄鉱の岩石で、細かく砕いて鉄絵釉として陶器の絵付けに用いられてきた。昭和４０年頃までは、「オニイタ」がトラックや荷車等で持ち込まれ、質の悪い

ものは石垣に転用されていたと言われている。

窯道具と「オニイタ」を織り交ぜて造られた窯垣の例を写真－９に示す。この場所の積み方の特徴としては、「エンゴロ」は半円に割れたものが使われていること、他の窯垣と同様に「オニイタ」「タナイタ」が斜めに埋め込まれていること、などが挙げられる。



写真－９　オニイタが混在している窯垣の例（撮影：筆者 2003）

以上のように窯垣は、併用されている石垣の積み方や、用いられている材料等で、およその構築時期の推定が、それぞれの場所で可能であると考えられる。さらに、窯道具の刻印の調査、敷地内の建物の建築時期などから、より具体的な窯垣構築の手法や形態の年代別推移が体系づけられると考えられる。

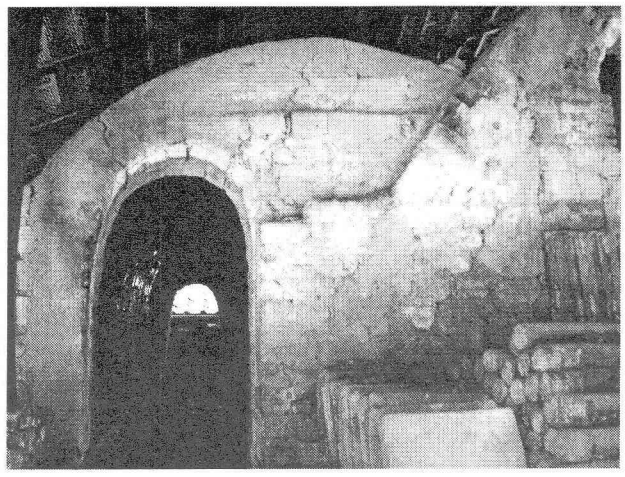
６．築窯技術と窯垣の関連に関する考察

瀬戸において登窯に類するものが築造されるようになったのは江戸に入ってからである。江戸中期の「かみた古窯」の発掘調査において、「エンゴロ」が窯の築造のための材料として用いられていたことが確認されている[3]。具体的には、「エンゴロ」に粘土等をつめて柱状に積み重ね、さらに粘土を上から塗り込めて窯が構築されていたとされる。この「かみた古窯」の「エンゴロ」が瀬戸市で保存されている「エンゴロ」の最も古いものとされている[4]。(ただしエンゴロの原型は室町期に見られる)

本業窯と呼ばれる陶器を制作する登窯のひとつが「洞本業窯」（ほらほんぎょうがま）として洞町地区に残り、瀬戸市の文化財に指定されている。この窯は、江戸末期に構築された登窯の窯材を利用し、昭和２４年に再構築されたものであるが、その材料として古い窯道具が使われている。主に「タナイタ」を積み上げてあるが、「エンゴロ」「ツク」も随所に埋め込まれているのが観察できる。しかしながら、その積み方に窯垣と共通する部分はあまり見られない。たとえば窯垣では、「タナイタ」は斜めに積み上げてあることがほとんどであるが、「洞本業窯」では、すべて水平に重ね上げられている。さらに、窯垣を構築していたのは「ヤロ（ヤロサ）」と言われる窯元で働く人々であったと言われ、「カマナオシ」と呼ばれる窯本体を修繕する人々とは別であったと言われている。以上より、築窯技術が窯垣の発生に対して、直接的な関わりはないと思われる。

一方で、住宅の基礎部分に窯道具を積んでいる場所も多数見られ、石工や左官等による指導があった可能性もある。

いずれにしても、一部の窯垣に見られる石積み工法に即した精巧で美しい造りはどのようにして発生したのか、今後の研究課題と言える。



写真－１０　洞本業窯の一部（撮影：筆者　2004）

７．まとめと今後の課題

以上の結果をまとめると、次のようになる。

①窯垣は、材料そのものが瀬戸市における窯業の歴史を語る産業遺産であり、地域的特色が極めて顕著である。

②土木構造物としてみた場合、石積み工法の一種であるが、独特の文様を織りなし、意匠的に美しいものになっている。

このように、窯垣は文化財としての要件を十分に備えていると考えられるが、現在、特に文化財等に指定されておらず、私有地に多く存在することから、景観条例の中での補助制度以外に、保存に関する支援がないのが現状である。また、林や雑草の中に埋もれて崩れかかっているものや、素材が陶器であるため、ひび割れが多数生じているところもある。

したがって、窯垣の保存・活用にむけて、窯垣の成立と発達に関する体系化が不可欠である。少なくとも明治期には窯垣は存在していたようだが、それ以前にさかのぼることについては、より詳細な調査が必要と考えられる。

なお、江戸時代において一般に窯業の産地は各藩より保護・統制を受けていたと言われ（瀬戸の場合は、尾張藩）、窯道具についても独自に発達しており、他地域との交流を前提とした比較検討は難しいと考えらえるが、広く窯業の産地における廃物利用の土留めや塀についての研究は、土木史研究として興味深いテーマと言えよう。

【謝辞】　本研究遂行にあたって聞き取り調査にご協力いただいた瀬戸市役所、洞町文化会の方々に厚く御礼申し上げます。

【参考文献】

1）玉井明子，久隆浩：伝統的窯業産地における地域資源を保存活用した住民参加型観光ルート整備の課題－愛知県瀬戸市洞地区を対象として－，第３５回日本都市計画学会学術研究論文集，pp.685-690，2000.

2）加藤唐九郎：カラー日本のやきもの１１瀬戸,1974.

3）愛知県名古屋土木事務所・愛知県教育委員会；かみた第１・２古窯，1975.

4）瀬戸市歴史民俗資料館；瀬戸の陶磁器の生産用具及び製品資料目録，1992.